

駄荷古墓発掘調査概報

1984

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

1.はじめに	(1)
2.位置と環境	(2)
3.調査の概要	(5)
4.まとめ	(8)

例 言

1. 本書は昭和58年度に実施した広島県佐伯郡吉和村の駄荷地区ほ場整備事業に
係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は吉和村から委託を受けて、(財)広島県埋蔵文化財調査センターが
実施した。
3. 本書の執筆・編集は眞治益生が行った。
4. 図面の整理・製図等は眞治が行った。
5. 本書掲載の第1図の地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1(津田・
三段狭)を使用した。

I はじめに

昭和57年11月、佐伯郡吉和村から広島県教育委員会（以下県教委）に駄荷地区は場整備事業に係る文化財の有無ならびに取扱いについての照会があった。当該地区には周知の遺跡である駄荷古墓が存在することから、昭和58年5月県教委としては設計変更等による現状保存及び設計変更が不可能な場合は事前の調査が必要である旨を回答した。しかし、当該事業は昭和58年度事業として計画され、設計変更が不可能であることから、同月財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下センター）に対し調査の依頼があった。センターでは昭和58年度の事業はすでに年間計画のもとに実施中であるため、現段階では調査は不可能であるが、以後の調査計画に変更等があった場合は再度協議する旨の回答をした。その後調査計画に変更が生じ、調査を実施することが可能になったことから、9月に調査を受託する旨の回答を行い委託契約を締結し、調査は10月17日から11月2日までの期間実施した。

なお本調査実施に当っては、広島県教育委員会の指導、助言を得るとともに、吉和村企画課ならびに吉和村教育委員会の御協力を頂いた。また現地作業に当っては地元の方々の御協力を得た。末筆ながら謝意を表したい。

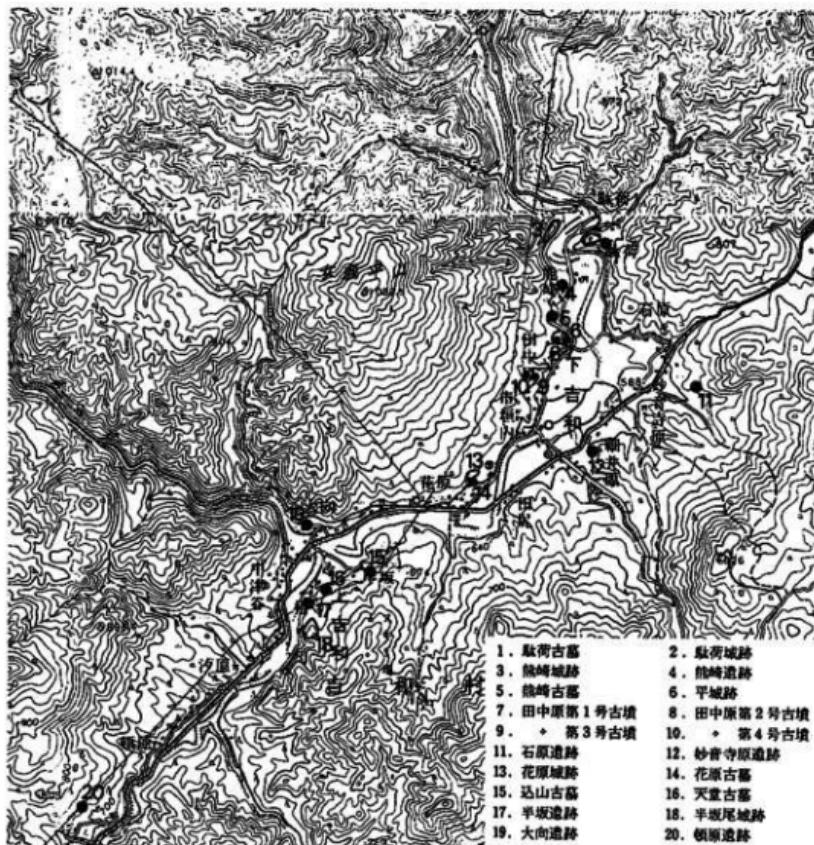


駄荷古墓遠景、背景は駄荷城跡（東より）

II 位置と環境

(第1・2図)

駄荷古墓は、広島県佐伯郡吉和村大字駄荷3142, 3143の1に所在する。吉和村は広島市北西約30kmに位置し、島根、山口両県と境を接し標高600m以上の中国脊梁面の冠山南東麓に広がる山村である。村は東西16km、南北17kmあり、そのうち約9割以上は山地形を呈し、集落は頓原、上吉和、下吉和の南西方向から北東方向に細長く腰開

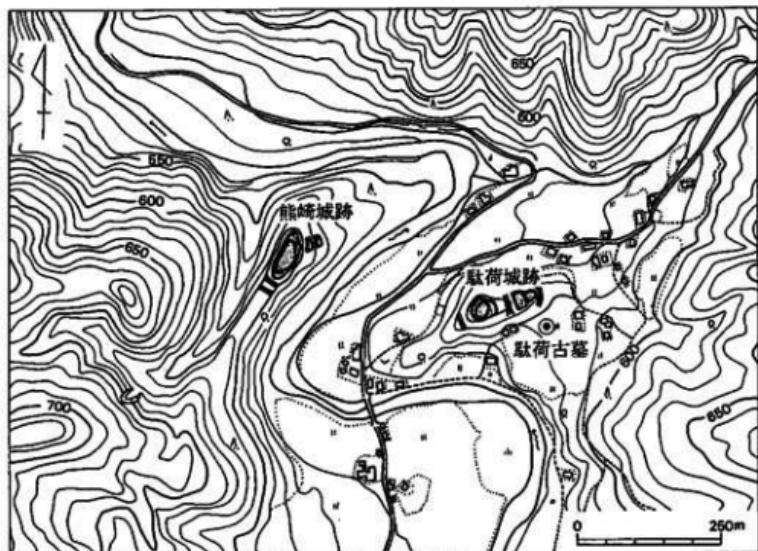


第1図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

する盆地に集中する。この盆地の中央を太田川の支流吉和川が大きく流路を変えながら南西から北東に貫流し、周辺部に段丘斜面を形成する。村の産業は農林業を主体としており、近年過疎化が進んでいるが、中国縦貫道の開通及び吉和インターチェンジの設置によって他地域との交流が拡大・促進され、村の活性化が期待される。

このたび発掘調査した駄荷古墓が所在する吉和村の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡として昭和45年にその存在が確認された冠遺跡があげられる。遺跡が所在する冠高原一帯が石器の材料である安山岩の産地であることから、多量の石器が出土し石器の製作跡とも考えられている。中国縦貫道の関連工事に伴う昭和54・55年の2ヶ年にわたる調査では、ナイフ形石器を主体として、舟底形石器・スクレイパー・尖頭器など数万点に及ぶ石器類が出土し、石器の製作跡とも考えられ、西日本でも有数の遺跡である。縄文時代の遺跡としては頓原遺跡・半坂遺跡があげられる。とくに頓原遺跡は縄文早期を主体とする石器製作遺跡として注目される。半坂遺跡は縄文早期、前期及び後期の遺物が出土している。古墳時代の遺跡には田中原古墳群（4基）がある。いずれも径10m前後の円墳で内部主体については不明である。

中世の遺跡には、駄荷古墓の位置する丘陵西端には階段状に3つの郭を配した駄荷城跡が存在し、吉和川を挟んで西側対岸には昭和55年発掘調査の熊崎城跡が存在する。



第2図 周辺遺跡図 (1:10,000)

熊崎城跡は4つの郭と堀切2、豊堀2より構成される山城で、調査では遺物等一切出土しなかつたため築城年代については明らかではない。しかし『芸藩通志』によれば駄荷城、熊崎城とも城主は河野藏人の記載があり、この人物に関連する山城であろうと推定される。このほか吉和村内には平城跡、花原城跡、半坂尾城跡、平家城跡がある。平城跡は駄荷城跡の南約900mに位置するが、土塁や堀切などではなく丘陵の平坦地に伝承しているのみであり詳細は不明である。花原城跡は女鹿平山南麓にあり約20×40mの平坦地が認められるが土塁等ではなく、安達与三衛門の屋敷跡と言われている。半坂尾城跡は上吉和一帯を望む丘陵上にあり、郭2、堀切1があり、城主三浦兵部と言われており、半坂遺跡の付近に三浦氏の墓と伝える五輪塔がある。平家城跡は標高1,339mの冠山から東に派生した尾根上の標高約1,100m付近にあり、屋敷跡がある伝えられているが詳細は不明である。

山城に関連して中世古墓の在り方をみると村内に点在するが、とくに中国縦貫道関係で発掘調査の妙音寺原遺跡は最大の規模を有し、7.3×4.7mの2段の基壇を有す第3号積石塚を中心に積石塚17基、土塚墓14基からなり、3時期に渡る築造過程が明らかになり、築造年代について室町～江戸期に比定されており、武士階級による埋葬と推定されている。これら両遺跡の積石塚の基壇構造については、本遺跡に類似する点が認められ、本地域の積石塚の特徴が次第に明らかになったと言えよう。この他、周辺部には積石基壇2基からなる熊崎古墓、積石基壇が2ヶ所にある花原古墓、基壇状の高まりに五輪塔がある天堂古墓等がある。

この他に遺跡としては、大向遺跡では備前焼の船德利の中から古銭が多数出土しており寺屋敷跡と伝えている中世の遺跡がある。

参考文献

広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(4)

昭和58(1981)年

広島県教育委員会『熊崎城跡発掘調査概報』昭和56(1981)年

西本省三・葛原克人編『日本城郭大系3 広島・岡山』(新人物往来社)

昭和55(1980)年

広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設予定地内埋蔵文化財包蔵地分布図』

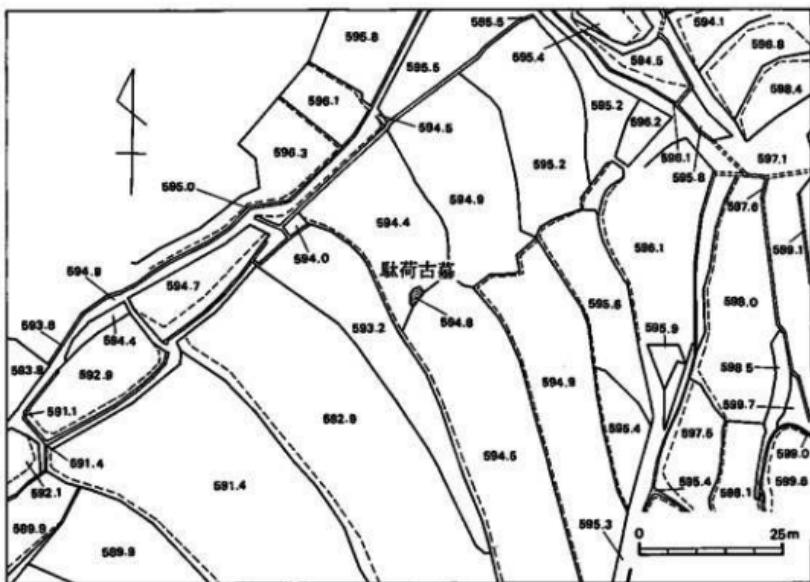
昭和46(1971)年

III 調査の概要

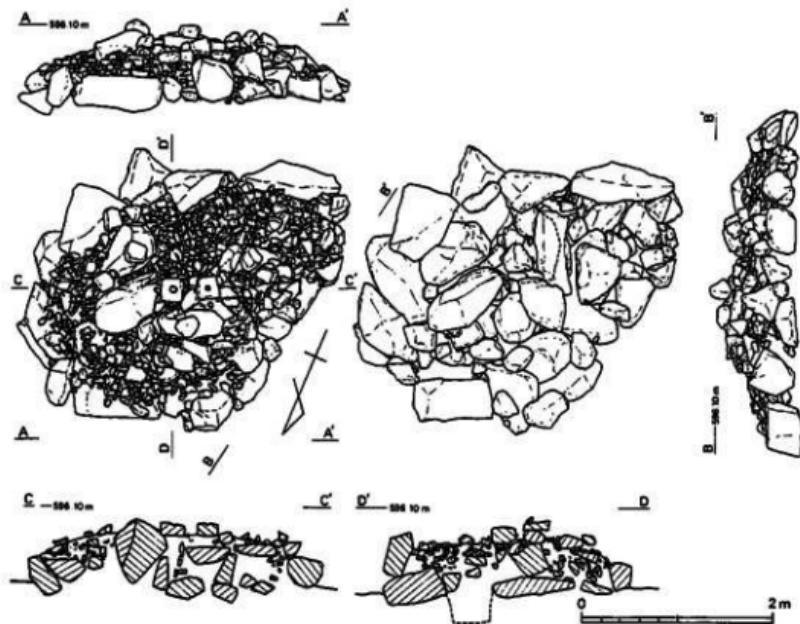
(第3～5図)

駄荷古墓は、駄荷城跡東側丘陵上にあり、現状では30×20mの範囲で取り残された荒地となり、周辺は耕地化されている。周辺耕地面とは約0.3mの比高差を測り、一部の基壇石が露出していた。この基壇上に2基の五輪塔が存在していたが、転落等によって石の組替えが行われた形跡があり、本来の姿を留めるものではない。

調査はまず周辺の消掃作業を行い、基壇の外形を検出することから始めた。この結果、本古墓の基壇は長辺2.8m、短辺1.8mを測る平面菱形を呈して、高さは約0.7mを測ることが明らかとなった。基壇は北辺及び東辺部の面が比較的整っているほかは、大型の石材が露出するため平面的には凹凸が著しい。また北辺と東辺については基壇面の接合の有り方が直角に接しておらず鈍角となっており、本来、方形基壇であったものが後世の擾乱等によって著しく破壊されたことを窺わせている。



第3図 駄荷古墓周辺地形図 (1:1,000) (アミ目:古墓) 数字は標高

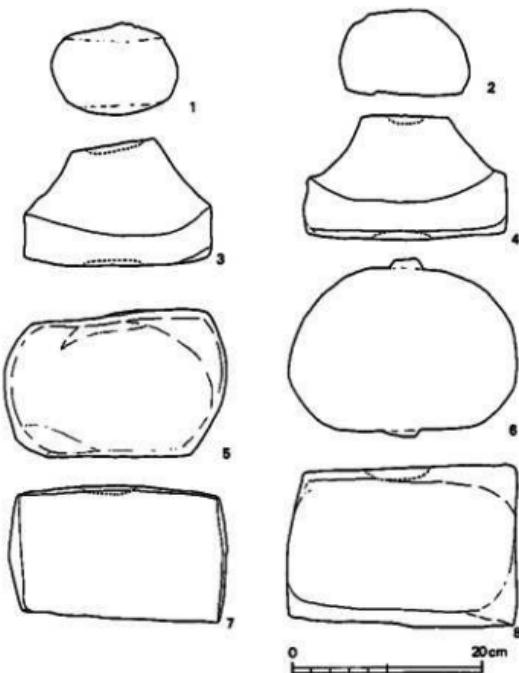


第4図 駄賀古墓実測図 (1:60)

基壇北辺及び東辺部は概して石材の広口面を外面に露出し一段積みするもので、間隙には角礫等を挿入している。基壇上面は拡大より人頭大の円礫及び角礫で全面被覆し、その中央部に2個の地輪を約25cmの間隔で並べて据えている。この被覆層は基壇上面より約30~35cmの厚さの範囲に及んでおり、この直下より大型石材を乱雑に組込んだ地下構造物を検出した。

この地下構造物の中央よりやや南側に偏して埋葬施設である素掘りの土塙を検出したが、その規模は85×75cmの不整形を呈し、深さは約35cmを測る。土塙は基壇底面とほぼ同レベルより垂直に掘込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土であり、この覆土中より少量の白色化した骨片が出土しており、火葬を行った後に埋葬したものと思われる。

他には基壇上面より少量の明治期以降の陶磁類が出土したほか、墓域覆土中より少量の鉄製品が出土したが、本古墓成立期を明確にしうる遺物は出土しなかった。



第5図 駄荷古墓出土石塔類実測図（1：6）

本古墓基壇上面に据えられた2基の五輪塔はいずれも小型で、石材は花崗岩であるが、表面の風化が著しく積石基壇に比べてやや見劣りがする。

空風輪（1、2）は一石で造られているが、ともに上半部の空輪を欠損している。

火輪（3、4）はともに軒が端に向って次第に反り、軒厚となっている。いずれも上面及び下面に浅いほぞ穴を穿っている。

水輪は中位に最大幅を有す（5）と、中位より下側に最大幅がある（6）とがある。

地輪（7）は幅に比べて高さがなく2：3ほどの比になっている。（8）は（7）に比べてやや大きく重量感がある。ともに上面に浅いほぞ穴を穿っている。

IV ま　と　め

今回発掘調査を実施した駄荷古墓については、前述のように後世の攢乱が著しいため本来の姿を留めるものではないが、調査で明らかとなった事柄を整理し、まとめに代えたい。

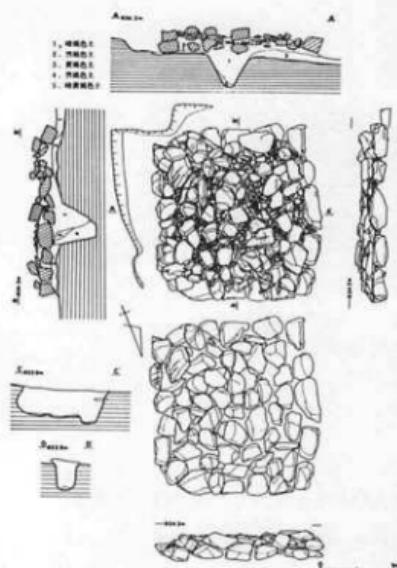
本古墓基壇については、北辺部及び東辺部が比較的面を整えているほかは面が揃っていない。また北辺部、東辺部の接合角度は鈍角となる。本来方形状プランの基壇であったと推定されるが、攢乱のため全体の規模は明らかにしがたい。

基壇は黒褐色の基盤面に石材の広口面を外側に出し一段積みするもので、内側には大型の角礫を乱雑に挿入する。そしてこの上に拳大より人頭大の円礫及び角礫を30～35cmの厚さで全面被覆し基壇上面を形成する。基壇上面には2基の五輪塔が据えられていたが、ともに空風輪より水輪までは組替えが行われた可能性が強いが地輪については地輪下面が基壇上面より低いことから原位置にあるものと推定される。

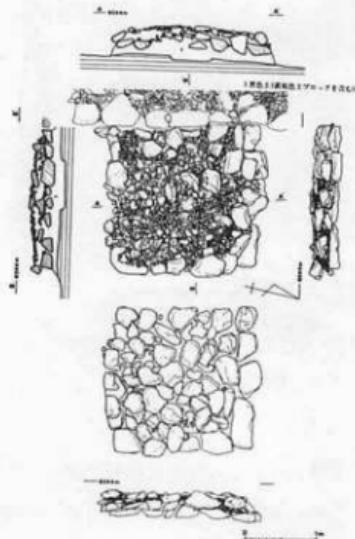
一方埋葬施設は地輪直下には存在せず、やや南側に偏して基壇基盤面より掘込まれている。形状は不整形で、覆土中より小片の焼骨が出土しており、火葬後の埋葬が考えられる。しかし年代決定となる遺物が出土しなかったため、埋葬時期については明確にはしがたいが、ただ基壇上面に据えられた五輪石の形態規模等から中世後半のものと想定される。また被葬者については、地元の伝承では本古墓の被葬者は駄荷城主であったと言われているが、これも明確ではない。ただ吉和村内の古墓が山城周辺に点在する状況などから、駄荷城と何らかの関係を有する者の墓の可能性がつよい。

ところで近年広島県内での中世関連遺跡の発掘調査例が増加しつつあり、このうち古墓に関する調査例が増えるにつれて、その構造等も徐々に明らかになってきた。

古墓の形態には平面プランより円形と方形等に分けられる。また構築法の点では石材を使用するいわゆる積石塚と、古墳と同様な盛土だけのものとに大別でき、いわゆる積石塚だけを見てもさらに（1）基壇をもたず盛土した上面だけを礫で被覆するもの、（2）基壇をもたず礫（混土礫）だけで積上げるもの、（3）基壇をもち内側は盛土し上面だけを礫で被覆するもの、（4）基壇をもち内側及び上面とも礫（混土礫）



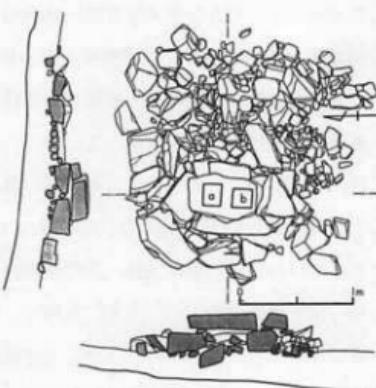
妙音寺原遺跡第1号墓



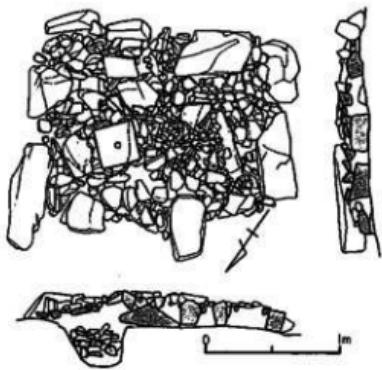
妙音寺原遺跡第4号墓



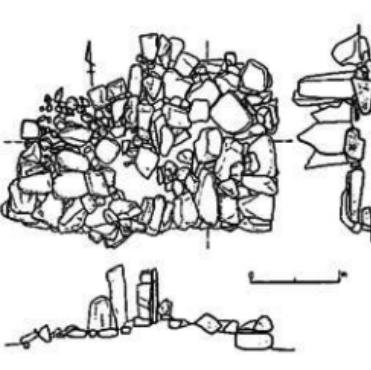
塚ヶ迫積石塚



桑の木五輪塔・宝鏡印塔基壇



新開第3号五輪塔基壇



新開宝篋印塔基壇

で積上げるものなどに細分でき、これに大型のものから小型のものまで様々である。このうち駄荷古墓は方形の（4）の積石塚に当たり、小型の部類に属する。

駄荷古墓と類似する遺跡を周辺地域で見ると、妙音寺原第1号及び第4号古墓⁽¹⁾があげられる。妙音寺原遺跡は駄荷古墓の南約2kmに位置するもので、山際斜面をカットし前面に盛土し基盤面を整備した上に積石塚17基、土塙墓14基を営んだものである。このうち第1号及び第4号古墓は基盤面に直接石を据え、内側には大型の石材を比較的整然と並べたうえ、縁辺部を大型石材の広口面を整え2段積みする1辺2~2.4mの方形積石塚で、円礫等で被覆し上部構造とする。また埋葬施設は基盤面より掘込む素掘りの土塙で、駄荷古墓と近似する。しかし駄荷古墓と比較した場合、妙音寺原遺跡のものが崩っており、この点駄荷古墓が後出的である。

また駄荷古墓より南西約3.5km離れて位置する込山遺跡も類例としてあげられる。本遺跡は妙音寺原遺跡同様、自然傾斜面に盛土し平坦面を造成したうえに4基の方形積石塚を構築するものである。規模は1辺2m未満の小型基壇であるが、基本的な構築法は前二者と共に通する。ただ込山遺跡の場合埋葬施設は検出されていない。

一方他地域に目を向けると、類似例として山県郡千代田町丁保余原所在の塚ヶ迫積石塚⁽²⁾、高田郡八千代町下土師所在の桑の木五輪塔、宝篋印塔⁽³⁾、同所在の新開第3号五輪塔⁽⁴⁾、同町土師の新開宝篋印塔⁽⁵⁾があげられる。

塚ヶ迫積石塚は塚ヶ迫第1号古墳墳頂部を削平して平坦面を造出し、この上に積石

基壇を構築するもので、規模は1辺3m弱の方形基壇である。基壇は比較的大型の石を縁辺部に並べ、その内側を大小の礫で積上げて構築しているが、下部構造は不明である。成立年代については古銭が出土していることから中世期に入るものと思われる。

桑の木遺跡の場合、原地形を利用して構築したもので、1辺約2mの方形基壇を築く。基壇縁辺部には大きな割石を据え、内部には礫を1~3段積上げ、この上面に大きな板石をのせ台石とし、五輪塔、宝鏡印塔をさらにこの上に据えている。埋葬施設については明らかではない。成立年代は室町末期から戦国時代と推定している。

新開第3号古墓は、丘陵斜面をカットし平坦面を造出し基盤面とし、この上に1辺約1.7mの方形基壇を構築している。基壇縁辺部は大型の石材を使用し河原石で被覆し上部構造としている。埋葬施設は基壇の片隅に偏して地輪の直下にあり、墓壇中に扁平な角礫、河原石が並べて置かれていた。埋葬時期は室町時代末期、戦国時代と比定している。

以上みてきたように駄荷古墓と構造的に類似する例はこの他にも賀茂郡大和町箱川所在の樅敷山積石墳墓群等比較的広範囲に渡って確認されており、通有の構築法であったと推測される。また成立年代については室町時代を中心に戦国期まで継続するもので、この間広く流布したと推定される。

註

1. 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『沖田古墓』
昭和58(1983)年、県内中近世墳墓発掘調査報告一覧参照。
2. 3. 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(4)
昭和58(1983)年
4. 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(3)
昭和57(1982)年
- 5~7. 土師埋蔵文化財発掘調査団『土師一土師ダム水没地埋蔵文化財発掘調査報告』
昭和45(1970)年
8. 榛梨埋蔵文化財発掘調査団『榛梨ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査概報』
昭和45(1970)年



a. 駄荷古墓調査前全景（南より）



b. 同上 基壇全景（南より）



a. 駄荷古墓下部基壇全景（南より）



b. 同上 中央墓塚（南より）

駄荷古墓発掘調査概報

1984.3

編集・発行

(財)広島県埋蔵文化財調査センター
印刷 至誠堂印刷株式会社